

信頼の分析—「信」じ「頼」る日本的心性—

近藤良樹

1. 頼み

信頼は、信じることであるが、同時に、信じる相手に対して「頼り」「頼む」、あるいは「頼もしく思う」ものである。まず、信頼という信のなによりの特長をなすと思われる、この「頼」から見ていくことにしよう。

(たよる)「頼りにする」卑近な例として、よく幼児の親への態度があげられる。幼児は、無力であり、親という有力な庇護者に頼りきっている。いずれ自立すべきもののその力がなお未熟で、手助けをしてもらわねばならない状態にあつて、その役をしてくれそうな者を身近に見つけ出して、これに寄りかかり無条件に依存し、ささえを求めるのである。ただし、幼児の場合、「頼」は、顕著であるが、「信」は、懐疑能力を前提にするのが普通の信であるから、あるといえるのかどうか、問題である。

「たよる」とは、有能・有力なものに、無力なものが、力を貸してもらおうと拠りかかることである。頼る者は、その頼りとする相手に媚び、気に入るようにと従順にかかわることにおいて、その庇護の力をひきだす。無力なこの頼る者は、その頼りになる相手を「手段」とする。たより(便り)＝方便とするのである。有力・無力の力関係でなら、無力な者が力ある者に仕え、その手段となって支配されるのだが、そうではなく、逆に、力ある者が自らを無力な者の手段とし献身・奉仕する。この無力な者は、有力な者の愛の対象であったり、援助・贈与にふさわしい対象と見なされているのである。たより(便り＝頼り)になるのは、したがって、自然的には家族・血縁であり、さらには、利害を共にし、協力・共同する間柄にあるものということになる。

この一体的共同的关系下にあつて、(力をと)頼るから、頼れる者(力を出す者)となり、頼りになる者があるがゆえに、これを頼りにする。両者は相互的であつて、子供が求めるから女性は母親らしくなり、母親がいるから子供はいつまでも子供に留まるのである。頼る者・頼られる者の両者は、相互前提的であるが、本源的には、無力な頼る者がこの関係をつくりあげる。力ある者がいても、頼る者がいなくては、頼られる者とはならない。しかし、頼る者は、頼りない者にでも頼り、これを頼られる者とする。

この、相手に寄りかかり、その力のささえを求める非自立の心性は、成長にともなつて、次第に希薄になつて自立の精神が支配的になつていく。だが、時代と民族によつて、そのあり様は異なり、われわれ日本人においては、一人前になつても、非自立的な交わりが顕著に見出される。自立者からいうと「よけいな世話」に属するものが好んで受け入れられていて、電車では、駅名のみか、「お忘れ物のないように」とか「もう一分で発車します、お急ぎください」等と幼児を相手にしているような「世話」の仕方である。勿論、「たよる」方がこれをもとめているから、そうするのであろう。「傘をお忘れにならないように」

と言ってくれなかったから忘れてしまった、「あの電車の車掌は不親切だった」と文句をい
いかねないのである。

たより、たよられる関係は、自立者同士では、少なくなるが、日本人は、自立精神が乏
しく、周囲に依存する非自立の心性が顕著で、その信でも、「頼る」契機を強くもつ「信
頼」がいわゆるのであろう。trust を社会的な信の代表にする英米でも、当然たくさんの「信」
表現の言葉をもっているけれども、われわれのような、「信用」「信頼」と並べられるよう
な信の言葉はもっていないように思われる。reliance, dependence は、頼る (rely, depend)
ことにもとづく信頼であるが、おそらく、頼りになることが中心で、頼れるものは、信じ
るにたるということから、信じる意味をももつことになったのであろう。だが、かりにこ
れを「信頼」としても、そして「信用」が trust や credit で表わされるとき、われわれのよ
うにこの「信用」に対する「信頼」として、reliance, dependence がとられるというよう
なことはなく、われわれの「信用」も「信頼」も trust で済ましているように思われる。

(たのむ) ところで、「あの弁護士を信頼している」と「信用している」では、信の有り方
は相当に異なる。「信用している」という場合は、信じる者は弁護士と対等のつもりであり、
ときには「信用している」につづけて「悪徳弁護士ではないと思う」と、不信とうらはら
である。「信頼している」では、人物が高く評価されているのであり、頼みになる人物であ
るということであろう。「あの弁護士は、信頼でき、この件では一切を任せている」という
場合、ここでの「頼」は、「頼む」つまり、寄りかかり依存しつつ「願い」「まかせる」と
いう契機をもつことになろう。

たのむ者は、求め願う事柄を、つまりは「たのみ」を、あいてに聞き入れてもらい、こ
れについて、相手に任せ、委ねる。「たのみます」というとき、無力な者の立場からの委託
を表明している。「たのみ」は、「願い」の意味をこめていわれる。懇願するとき、「たのむ
から…」とか「是非、お頼みします」と言う。無力な依頼者は、自身ではなにもできない
のであり、相手次第であって、この頼みとする力ある者に懇願し、その力を自分のために
発揮してくれるようにと乞い求め、「たのむ」のである。

信頼の「頼」としての「たより」や「たのみ」は、依頼・懇願し委任することであら
うが、これらは否定的な意味合いで言われることがある。「ひと頼みにしてはいけない」とか、
「ひとを頼ってはいけない」等という。だが、「信頼」は、そういう否定的な意味では使わ
れない。「ひとを信頼してはいけない」とはいわない。ひとを「信頼」することは、正義や
情熱と同じように、それ自体は常に良いことなのである。

頼むとか、頼るは、非自立的で依存するものとして、その行き過ぎは、他人まかせに墮
し、ひとに寄生することになる。「人頼み」は、ひとにまかせて、自分で責任を持とうとし
ないことである。これになれると、無責任になり、自分ですべきことをやらず、これをひ
とに押しつける怠惰な者となる。「懶 (なま) ける」とは、「頼る」「心」という漢字の組み
立てであるが、ひとまかせに墮した、ものぐさということであろう。

(頼もしく思う) だが、「信頼」は、盲信して、無責任でものぐさになるというような否定

的な意味になることはない。また、「頼」の「頼り」「頼む」という依存・委任・懇願の契機をかならずしももっていない「信頼」もある。つまり、信頼は、「信じる」のではあるが、「頼る」のでも「頼む」のでもなくて、相手への高い評価として敬意を表する場面でいわれるようなことがある。では、この「信頼」の「頼」は、どういうことになるのであろうか。直接的には頼るのではなく、「頼もしい」と評価しているのである。つまり、「頼もしいと思う」ことであり、「頼りになると思う」ことになるのであろう。頼り、頼むのは、非自立・依存のふるまいであり、存在のあり方になる。これに対して、頼もしく「思う」のは、主観の価値判断で、評価する意識主観のあり方になる。

「頼もしい」「頼りになる」という評価は、人の評価としては、高いものであり、「信頼できる人」という評価は、ひとの最高部類の評価になる。われわれ日本人は、周囲に信頼できる人をそんなにはもっていない。日々の生活において、個々の交わりでは、信用しあっているし、信用できるひとは、いくらでも見出せる。だが、「信頼できる」とまで評価できるひとは、そんなにいるものではない。信頼は、きわめて高い評価となる。trust(英語)やVertrauen(ドイツ語)は、「信頼」と訳されるが、われわれでいうと普通の「信用」にこれらは使用されている。基本的には「信用」と訳すべきであろう(ただし、creditが「信用」の代表訳になるので、trustは、「信頼」と訳するのが一般的である)。trustは、対等な自立者間の「信用」である。これに対して、「信頼」は、われわれ日本人の、非自立依存の心性に由来し、かつ上下関係を気にする社会空間に成立した特殊な「信」になるのではないかとと思われる。trustやVertrauenでは捉えられないものが「頼」のもとにはある。信頼するのは、下位の者が頼もしい上位の者を信じるのが基本である。下位の者を信頼しているという場合は、謙譲の気持においてか、下位の者を異例的に高く評価してのことである。

「信頼」は、「頼もしく思い」、高く評価しつつ、信じるのであり、かつ、ときに応じて実際に「頼み」「頼り」にしていくものになるのであろう。この信頼の「信」は、基本的には「知」になる。懐疑をふまえ、それを不要とし、真実として受け入れる知の一形態である。これに対して「頼」は、現に「頼る」「頼む」ものとしては、知ではなく、「欲求」であり「意志」になる。あるいは、態度・ふるまいとして実践的で、存在的なものになる。「頼もしく思う」という「思い」をもつての「頼」は、評価であり、解釈・理解であって、意味付与的な知に属する。「頼もしく思う」の「頼」の方からは、「信」と「頼」は、いずれも「知」として、不可分一体的に機能しているものと捉えられる。「頼る」「頼む」の実践方面からは、「信」「頼」は、知と意志、認識(理論)と実践の結合となる。あるいは、意識と存在の結合となる。

2. 何を信頼するのか

一般に、「信じる」という場合、「私は、広島に国際テロ組織がある(=O)という極秘情報(=M)を信じる」というように、「Sは、直接には知らないOについての情報Mを、真実として(=)信じる」つまりは「S—M=O」の形をとる。どんな「信」も、根本的

に常にM=O構造をもつ。Oを信じる、Mを信じるということもあるが、それは省略形としてあるのみで、そういう場合も、正確には、S—M=Oになる。信頼もそのことは、同様である。「広島に国際テロ組織がある（O）という極秘情報（M）を」「信頼する」のである。

ただし、信頼では、そのウェイトは、O（情報の指し示すもの）ではなく、M（情報）にある。MとOを前にしていずれかを省略するとしたら、Oを省いて、「Mを信頼する」となろう。信頼がMを重視するのは、信じるに「頼もしい」「頼りになる」と評価できるのが、Mになるからである。私が、信頼し、頼ることができるのは、「広島に国際テロ組織があること（O）」ではない。あくまでも、それについての「極秘情報（M）」を信頼するのである。

（情報と能力ある物） さて、目的となる事柄（O）を指し示しこれに一致しているもの（M）としての、この信頼できるもの・信頼の担い手であるが、それは、単に人の言動にはとどまらない。信頼できる人物や組織があるし、信頼できる車や、盲導犬もいる。とはいえ、頼りにはなっても、信が問題にならないものは、当然のことだが、信頼の担い手にはならない。知りえないもの（O）について、その所与の言動やその担い手（M）を信じるということがなくてはならない。このMが常々正しくて信頼できるということである。

この信頼できるもの（M）としては、まずは、情報とその集合体、たとえば、新聞やニュースがあげられよう。われわれは「NHKの報道は信頼できる」とか、「スポーツ新聞のニュースは、信頼性に欠ける」等という。信頼できるニュースは、常々、その報道が正確で、頼りになり、これを頼みにしてまちがいが無いということである。信頼に欠けるスポーツ紙は、常に虚偽を言っているのではないが、ときに嘘を平気で報じるので、頼りにはできない、これを頼みにしていると、場合によるととんでもないことになる。信頼は、ここでは、その情報の担い手が情報能力に富んでいて、真実への使命感をしっかりと持ち、常々、うそ・あやまりがなく、頼りにでき、頼もしいと高く評価されて、その報道が信じられていることである。信頼は、個々のものへの信用と違い、一々にはチェックせず、その言動を常に真実とみなして、一段高い信のあり方をとる。

信頼は、物事についてもいわれる。頼りにできる物に対して、信がかかわるとき、信頼がいわれる。「マツダの車は、信頼できる」とか「アメリカドルは、信頼できる」という。マツダの車も、アメリカドルも、それらが「頼り」にされるという点では明確であろうが、問題は、単に「頼りになる」というにとどまらず、「信頼」つまり、「信じられている」点である。信の基本構造としてのM=O（所与の情報Mが、真実で、その指し示す事柄Oに一致すること）は、そこでは、見えにくい。

ここで、「頼りになる」のは、それらの車やドルの「能力」「性能」「実力」であろう。信頼の信もその性能等に結びつく。車の「性能」は、例えば、「この車は最高速度400キロをだせる」というような「情報」であり、そういうことのドライバーへの「約束」である。この約束（情報M）通りに現実に400キロだせたら（事柄O）、約束・真実を守った（M

=O)ということになる。性能通りで間違いない、本当だとなれば、それは、信に違わず、頼をはたしているのであって、信頼に込めているのである。「アメリカドル」も、同様であろう。その通貨の実力・能力（の情報・約束）の通りに頼もしければ、その実力は、本当であり、信じられるものであって、信頼になるわけである。

米ドルや車は、物だが人間の作ったものであり、自然物ではない。自然そのものにも信頼は言えるのであろうか。「阿蘇の湧水は、きれいで信頼できる」「北海道のわかめは、信頼してよい」という。その品質が高くて頼りになり、高品質を前提にし信じてよく、その求めに応じてくれておいしい「だし」がつかれるというような形で、信頼がいろいろ。

物ではないが、法的には物と扱われる生物についても、「この馬を信頼する」「この盲導犬を信頼している」等と信頼をいう。馬が「こんどは、勝って見せます」と約束するわけではないが、生物についても、その頼みとする実力・能力（M）ということと、それに従っての現実の働き・結果（O）の関係において、その一致・不一致、うそと本当の信・不信がいえるのであり、実力への信頼が言える。

（人物と組織への信頼） 信頼は、物や生物にもいうが、なんといっても、ひとへの信頼である。頼りになる人は、信頼する者から見て、力のある頼もしいひととして、高い評価が与えられる人になる。信頼される組織は、個人や他の組織から頼もしいと高評をえていて、信じるにたるものと見なされているのである。依存心の強いわれわれ（日本人）は、ひとや組織に頼りがちであり、頼れるものを見出していくことに長けている。自立精神に富んだものなら、つきあうに信用できるかどうかの点からのみ見るとき、依存的な心性のものは、同時に、頼れる頼もしいものかどうかという視点からも見ていく。「信用はできるが、信頼まではできそうにない」というような評価をする。

「信頼」は、漢字であるが、「信用」と違って、古くは、一般的には使用されていなかったもののようである。諸橋『大漢和辞典』では、「信用」は、『史記』などからの例がいくつかあげてあるのだが、「信頼」は、熟語としてあげてはあるものの、例は、ひとつもあげられていない。小学館『日本国語大辞典』でも、引用例は、明治以降のもののみであり、日本でも、一般的になったのは、明治以降のことかと思われる。契約等、日常の経済生活での「信用」が重要となった明治の近代市民社会の形成のなかで、「信用」のみでは済まない我々の「信頼」という特殊な信が自覚されることになったのであろうかと推察する。

この信頼という高い評価は、頼りになるという優れた実力の評価であるのみではない。われわれ（日本人）の社会が幼長の序、年功序列の上下関係を重視して来たことから、年上や目上への信頼となることが顕著である。こどものときの年長への依存を、大人になっても強くもつ。組織は上にたつものに組織の力を与える。頼りになるのは、したがって、信頼されるものは、上位のもの、年上のものとなってきた。対等の信用の関係とちがい、しばしば信頼関係は、頼りになる上位者への依存ということになる。

ひとへのこの信頼は、個々の信じるべき事柄についての信でもありうるが、ふつうは、人物への信となる。そのひとに発する言動は、基本的に無条件に信じることができるとい

う評価である。信用は、個別的に、このことには根拠があつて信用できるというのが普通だが、信頼では、そういう信用できることが繰り返されて、常に信用できるものと評価され、その信頼される情報やその担い手は、いつも、うそ・ごまかしがなく頼りになると、「信頼」を獲得しているのである。個々の信用(trust)については、その信の確かさを問わないのであり、その根拠・保証をもとめず、無条件に真実として信じ受け入れるのが、信頼(reliable high trust)である。頼りにできる人物への高い評価である。「かれは、信頼できるから、これも信用できる」のであり、「疑問が残るのだが、信頼できるかれの言うことだから、信用せざるをえない」ということになるのである。

3. 頼れる誠実なひと

信頼できる人物の道徳的あり方としてあげられるものは、なんといっても、誠実さであろう。信頼する理由をたずねられると「誠実なひとだから」と答える。婚約発表で「誠実な方で、深く信頼申し上げます」等ということになる。本当は、「お金持ちだし、家柄もいいから頼りになると判断して」なのだとしても、それはおもてには出しにくい。だが、誠実さを評価するとは、物や地位ではなく、ひとのこころのすばらしさに引かれてということであるから、好都合である。しかも、それは、うそではないということもある。どんなエゴイストでも、目的を達成するまでは、あるいは、すべからくはじめは、誠実に装うものだからである。

(対応すべき責務に応えるひと) 誠実さは、ひとの求めに応える場面で、責務が生じているようなところでいわれる。信頼される者は、頼られるひととして、その求めに応える必要のある立場にあり、誠実なひとは、それをしっかり自覚しているひとである。社会的な責務に応えるに、裏表なく、思いやりをもって、尽力する姿勢をもつところに、われわれは、誠実の姿を見出す。信頼の責務に尽力する誠実な人は、信頼できる人となる。

信頼では、信頼し頼る方は、非自立依存のひとであるが、これに誠実に応える頼もしいひとは、すくなくとも、当の事柄については、頼る者に頼る者ではない(相互信頼でも、頼るもの(内容や対象)は別である。同じものを頼るのなら、自分のものを頼り信じればよい。つまり、「自信」をもてばよい)。信頼する者に対して責任を感じて、ヘゲモニーをもって、自立的に対応する者である。この立場の違いを誠実なひとは、よく心得ているひとである。信頼される者は、あくまでも、応えていく立場にある。信頼に応えるものは、頼られているという自覚をもって、その責務をないがしろにすることなく、最後までこれを遂行していく姿勢をもつことが大切である。信頼する者は、誠実な者において、それを確かと感ずることができる。

(うそがない。陰日向なし) 誠実なひとは、うそ・いつわりのないひとである。ひとが誠実かどうかを判断するとき、このことによってそれを決めるぐらいに、裏おもてがなく、その言動にうそのないことが、誠実さの大きな特長となる。ということは、誠実なひとは、信用できるということである。その言動にはうそがなく、約束はまちがいに実行するひ

とであり、つねづね信じられるひととして、信用出来るひととなり、信頼できるひととなる。

われわれは、監視されていないところでは、さぼったり、ごまかしたりしがちである。だが、こういうとき、誠実なひとは、見られているところと同じように、ごまかさず、さぼらず、しっかりと自身のつとめ・責務をはたしつづける。誠実か否かは、ここで明確になる。信頼できる頼りになるひとは、任せられるひとであり、監視の有無にかかわらず、陰日向なしに、頼みを遂行する、誠実なひとである。

(相手への思いやり) 誠実なひとは、その相手に対して、思いやりをもつ。頼りたいと願う非自立の相手にとっては、誠実なひとは、この願いをくみとってくれるひととして、頼りになる信頼できるひととなる。すぐれた特殊能力があつて、これを頼みにしたいと思つても、そのひとが、敵対しているとか、冷淡であつたりすると、頼りにするわけにはいかないから、信頼することはできない。信頼関係には、頼る者にちゃんと応えてくれる、これをうけとめてくれる、思いやりのある者が求められる。誠実なひとは、相手の求めに真剣に思いやりをもって応えていこうとするひとであり、頼りにする者にとり、誠実なひとは、なにより信頼にあたいするひととなる。

(尽力) 誠実なひとは、応えるべきことについて、そのひとのために尽くそうとする。実行・実現に力をそそぐ姿勢をもつ。献身的にその対応をし、尽力するのである。誠実さは、相手の求めに応えることを責務と捉え、これに献身するのであつて、慈愛のようになににでも献身的というのではない。責務のあることに限定して尽力するのが誠実の姿勢である。信頼する側は、その頼りとすることについて、相手がこれに責任を感じ尽力する姿勢があれば、それで、頼れるのであり、愛のように全般的になににでも献身をもとめようというものではない。信頼関係は、商取引ならそれに限定してのものであり、それで頼りになれば、信頼できる相手となる。信頼には、愛の献身ではなく、誠実さの献身が見合っている。

この尽力・献身は、うそ・ごまかしがないこと、思いやりに富むことを、その行為によって示しているものでもあり、対応すべきことに、ちゃんと応えている誠実さの実証がここにある。誠実さは、なにより陰日向がなく思いやりに満ちたその気持ちにあり、ひとに応えるその心構えが肝心なのではあるが、それでも、ここだけでは、その誠実さは見えにくい。その見えにくい誠実さの見える部分の多くがこの尽力にある。現に身を粉にして尽くしているという誠実の姿がここに見出されるわけである。

(誠実のみでは無力) 信頼されるには、誠実であることが求められるが、誠実なら信頼されるのかというと、それでは、不十分になるときがある。精神的道徳的には、それでいいのであろうが、頼りにするものの内容が経済的なものだったとすると、いくら誠実でも、この方面で無力であつたのでは、頼りとすることはできない。頼みとすることについて、それに応えられるだけの実力がなくてはならない。誠実なひとは、無力でもよい。無力でも、うそがなく思いやりをもって尽力するひとであれば、十二分に誠実である。だが、頼りとすることがらについての能力・実力がないと、頼りとすることはできないから、誠実

なだけの無力な人は、そういう場合は、信頼されるひととはならない。

4. 頼れる能力（実力）

信頼では、信じて頼みとする。頼むとは、非自立依存の無力な者が、自分への援助・支えを請い求めることである。頼もしいのは、そのための十分な力をもっているひとであり、その能力を発揮してこれを依存するものに注いでくれるひとである。信頼されるには、頼みにでき、頼りにできる能力が必要なのである。「信頼できる車」のような物への信頼は、もっぱらに、この能力・性能に負うものであろう。

（能力）信頼される人物に帰される頼もしい能力・実力は、多様である。かりに一般的生活能力では、無能だったとしても、したがって、信頼されるひとではないとしても、ある分野の特殊な能力に秀でている場合は、その方面では、頼りになり、信頼されることになる。ほかにとりえはないが、「壁を塗らしたら天下一品の左官屋だ」というようなひとがいるもので、かれは、そのことにおいては信頼を得ることができる。

頼りになるこの能力は、かならずしも客観性をもったものである必要はない。信頼する者が、頼もしいと主観的に評価すれば、その能力がみとめられ、そこに限ってだが、信頼される。粗暴であることもギャング仲間においては頼もしく、粗暴ゆえに彼は信頼されることが可能であろう。逆に、いくら能力があっても、頼るものがないのでは、信頼は成立しない。第一、なにが能力になるかも、時とところでまったく異なることがある。たまたまその時代の求めるものにあっておれば、たかだか右腕が異常に強いというだけで、「天下の大ピッチャー」として能力を高く評価され、信頼されることもある。イタリアの画家カラバッチョのように、天才的な画家としての絶大な信頼をえながら、他方では、粗暴な累犯的犯罪者として社会的には警戒され不信の目でみられたような者もいる。

ふつうの「信頼」される人物は、誠実なひとで、まずは「信」用できるひと、まちがいないひとということであり、その余剰にその誠実な言動は「頼」りになるということであろう。だが、カラバッチョのように、特殊能力においてのみ「信頼」されるひとは、信じられるよりは「頼」りになることが中心にある。何といてもその特殊能力において、頼もしく頼りになるひとであり、それに随伴して、その能力（M）が間違いなく発揮されてことを成就する（O）と（M=Oを）「信」じるのである。

（やる気・実力）ところで、いくら能力があり、ひとの求める頼もしい才能があると認められても、それがあただけでは、頼みにできることにはならない。その能力が実際に発揮されて、頼りにしている者の願いをかなえてくれるのでなくてはならない。実際にその能力が発揮されて、その目的・結果を産み出す、その過程でのやる気・根気がある。その実行の確かさがもとめられる。それではじめて、頼れることとなる。信頼の「信」の契機は、主としてこれをめぐってということになる。実力・能力（約束M）が信じられるとは、それが、現実にとことを成就（事柄O）して、その実力通りとなることに間違いのない（M=O）

と確信されるということである。

実力は、単なる可能性ではなく、現実化しなくてはならない。発揮されない、成就されない実力なるものは、実力ではない。その成就されたものが、その実力である。現実化する力としてのやる気・根気までをふくめてが実力ということであろう。信頼の頼みとする実力・能力は、しっかりと成就されるものでなくてはならない。

(面倒見) 実力・能力があっても、それが頼みとしている者自身に振り向けられるのでなく、頼みは実現されない。その頼もしい実力が現に発揮され、しかも頼みとしている者にむけられるとき、やっと、頼みは実現され、信頼は、満たされる。

その実力を誰に振り向けるかであるが、ひとつには、その緊急度の大きいものに、より頼みとしているものに、向けられるであろう。だが、多くの場合、利害をともにするものに向けられる。となりの会社のためよりは、自分の会社のために、となりよりは、自分のうちのために、力を尽くそうとする。信頼するがわからいっても、信じられる者は、まずは利害をともにする者になる。なにより家族を信じるのであり、自分の属する組織の身内の者を信頼する。基本的な生活での利害は、家族・血縁においてつよく一致しているというのが、世界の共通の現象であり、ひとへの信頼は、これを第一にしているのが通常である。会社などの社会的組織での実力発揮は、その組織のためにするもので、その頼もしい能力は、この組織とこれに属する者の信頼をえることにとそそがれる。

(性能・品質) 物の能力は、性能や品質として、これらへの信頼がいわれる。車への信頼は、その性能の頼りになることへの信頼である。この信頼は、一方では、その性能の高さそのものの頼もしさへ寄せられ、他方では、この性能の実現の確かさに向けられるものになる。その物の性能 (M) とその実際 (O) の一致に信がなる。そのうたわれている性能 (約束M) がうそ・いつわりでなく、本当であって、その通り (結果O) が実際に達成される (M=O) と、信じるのであり、信頼するのである。北海道のわかめへの信頼は、その高品質と均質であることの確かさによる。人の場合の実力と同じように、その能力・性能・品質そのものと、その現実化の確かさに、信頼の目は集中する。高い能力が頼もしいことはいうまでもなく、性能・品質の高さが、まずは信頼の注目するところである。かつ、その物を利用する者からいうと、その性能・品質がまちがいなく常に発揮されることが重要になる。

工学の方面で「信頼性」が言われるが、その場合、品質の高さとともに、精確で間違い・誤差の小さいことが問題になる。この正確さ・誤差の小ささは、その物を利用する者には大切なことである。その誤差内でまちがいがすむということで、その物の利用は精密となりうる。ここでいわれる信頼(reliability, dependability)は、その頼もしさ「頼(rely, depend)」が中心ではあるが、同時に、「信」ももっている。その性能 (M) について、これが発揮されてことを成就する (O) かどうかは、それを働かせてみなくてはわからないのである。その性能がまちがいなく発揮され、ことを成就する (M=O) であろうと、しかもそのうたう誤差の範囲内でそうなると、信じるのである。

ここでは、誤差(error)そのものが信の問題なのである。誤り・まちがい(error)は、予定し約束すること (M) に対して、その現実の結果 (O) が一致しない、つまり、正しくないということである。その一致について、直接的には知りえないが、一致していて正しいにちがいないと受け入れることが、信じるということである。誤差の範囲を越えているところは、一致が保証される、信じてよい。が、誤差の範囲のうちでは、一致は保証できない、信じられないということである。誤差を小さくするのは、この一致の保証できない部分、信じることのできない部分を小さくして、信じてまちがいない部分を多くしよう、信頼性を高めようということである。つまり、誤差とは、信頼のその「信」そのものを問題にしているのである。

5. 信頼の制度・機関

信頼が周知の者のあいだで問題になっているだけなら、持続して付き合うなかでは、おのずから信頼に足る者かどうかははっきりしてくる。だが、現代社会の交わりは、疎遠な未知のひととの交わりを広く求めている、そのよきは知らないひとを信じる必要がでてくる。心臓の病気になったとき、医者に行くとしても、近くの内科の医者については、なにも知らないのが普通である。信頼でき頼りにできるひとなのかどうか、各個人が経験しながら判断していたのでは、まにあわない。

信用については、商品の売買契約など、知らないひととするのが普通で、しかも信用しあわなくては契約できないから、信用できるように担保をとったり保証人を立てるなどの制度をつくっている。信頼も、それがないとひとにまかせられないが、知らないひとを頼りにして、運転をまかせてバスに乗り、病院の診療を受ける必要がある。信頼できる保証が、そういう制度が求められることになる。あるいは、機械などの物の性能も、信頼できるものだという保証がほしい。

そういう必要から、われわれの社会は、信頼の制度、信頼の機関をつくっている。人物への信頼の保証は、その能力について検査をして、資格・免許をあたえるかたちで、これを行なっている。物についても信頼のために、各種の組合や公的機関が規格をつくり、それに合格しているかどうかの検査をして、その保証をしようとしている。それらの免許とか規格については、試験・検査機関が厳格で、機関としての信頼をえていなくてはならない。検査機関は、私的なものでも厳正であれば十分であるが、多くは、公的機関による。公的機関は、公平で、検査される私的なものから超越しているはずだからである。厳正でまちがいない検査・試験をやっているとの信頼を得ている機関の保証するものは、確かだということになる。

(能力検査—資格・免許) 信頼は、頼りにするものとして、頼れる実力・能力を求める。この能力を検査して、それが確かにそなわっていることを証明するのが、資格試験になる。これに合格すれば、その「資格」が認定される。そして、資格のあることによって、その専門家としてその社会に活動することを許可するのが「免許」である。医者とか運転手は、

そういう資格をもち、免許をもっているもののみがなれる。それにより、これらを頼りにし信頼してバスに乗ったり、病院で治療を受けるに、安心して身を任せることができるのである。

ただし、この能力試験・資格試験は、最低のレベル以下を切り捨てているだけである。専門家としての能力の最低保証をしているのであって、専門家として優れていることを語るものではない。それでも、「その専門家として通用する」と免許が出されているのであり、頼っていいのである。特に医療では、薬など、その効能はひたすら信じる以外ないが、医者の方だから、信頼してよいということになる。

資格・免許は、その分野の能力の最低ラインよりは上で、なんとか頼りにして使いものになるということである。そういう有資格者たちのうちでの、より高い、より信頼できる者は、コンテストでその能力を競い合うとか、より上級の資格というかたちで、ランクづけされることがある。あるいは、その分野の職の募集や、昇進をもつての、よりよい組織への所属、より高い地位の獲得という形になる場合もあるが、これは、専門の実力よりは、社交能力におうことも少なくなく、その専門ということでの信頼とは直結しないかもしれない。それよりは、同じ分野の者の中での評価・評判の方が信用できるであろう。

ところで、資格・免許（実力）があっても、それが実際に発揮されるとは限らない。まちがいなく、その実力が発揮されることの保証がなくては、信頼は、確かとはなりにくい。実力発揮のためのしっかりした組織体制、管理の制度・機関が求められる。バスの運転手の健康管理が確かで、飲酒運転には厳罰が科せられる体制になっているとか、医療ミスを隠す体質を改めこれを厳しく追及できる管理体制をとること等をもって、その方面での信頼は確かなものとなる。

（性能検査）物への信頼は、その性能や効能の検査ということになる。人の資格・免許とおなじように、求められている基準以上になっているか、規格にあっているか、あるいは言われているとおりに機能することになっているかとかが検査される。この検査に合格した物は、合格したとお墨付きをもらって、その同一種のものに「合格」の印をすることが許される。利用者は、その印をもって、その規格・基準に到達している品物として信頼をよせることになる。わが国の J I S 規格や J A S 印が印刷されているのはその代表であろう。

信頼できるかどうかということでは、J A S 印の印刷してある一々の商品において、はたしてその通りの規格が守られているのかということも問題になる。守っていると信頼するのだが、そうではないかもしれない。この信頼のテストは、個々の商品について、ひとつひとつ検査すれば、これが一番確かである。電気製品などは、そうしており、テストをして、検査した者の名と合格の印を記して、信頼を確かなものにさせてくれる。大量で無理な場合は、一部の抜き取り検査がされる。それで問題がなければ、おおむね信頼できるというわけである。製品自体の検査がむずかしければ、基準通りに生産していることをチェックし、あるいは監視する方法もとられる。有機農法で生産しているかどうかは、農産

物自体では検査しがたいところがある。生産者を信頼する以外ないのだが、ときに生産の場を確かめられてその通りなら、その信頼は一層高まる。

6. なぜ、日本的信頼なのに、うちとそとを区別しないのか。

信頼は、信じて頼りにし、あるいは、頼もしく思い信じることであるが、これは、人や物を総体として頼もしいと思い高く評価して受けとめ、それに発する個別的な言動や性能・能力については、いちいちにはチェックすることなく真実にまちがいないと信じ、これをまるまる受け入れて、これに安心して身を任せ、頼りにしていくことである。依存精神をもってなる日本的心性にふさわしいこの信頼は、信用とともに、多く、そとでの「よそいき」の言葉として使用されている。だが、同時にうちのなかでもこれは使用される。親切・同情などは、われわれ（日本語）のもとでは、そとの他人に使用するのみで、うちの者・家族には原則としていわない（欧米の *kindness*（親切）や *compassion*（同情）の類は、家庭内でも使われる）。「わが子に同情する」親はいない。だが、「わが子を信頼する」のは親の常である。日本的心性をもって成立している「信頼」には、なぜ、日本的な「同情」や「親切」と同じような、うちと外ということでの使用の区別・制限がないのであろうか。

信じあえる間柄ということでは、利害の一致していることが重要である。敵からの情報は、敵対という利害の相容れない間柄ゆえに、疑いをもって受けとめられる。夫を妻が信じるのは、利害の一致が大きいからである（したがって、夫の浮気話では、夫のいうことではなく、そのことで利害対立のない他人の方を信じる）。利害ということでは、家族は、利害が根本的に一致していて、その限りでは、もっとも信じあえる間柄となる。そとの見知らぬものへの懐疑心を背後にもった信と、家族への全面的な一体・依存関係下の無条件的信の区別があつてよい。そとの「信頼」に対して、うちでは、別の深い「超信頼」があつてよい。

だが、うちより、そとの者の方が、信じるための根拠を多くもつ場合もある。信じることのできる根拠・理由に、人物としての誠実さと実力があげられるが、これは、うちの者より、しばしば、そとのそういう資質の人の方が確かである。車の運転を信頼できるのは、ペーパードライバーの夫よりは、実力のあるバスの運転手の方であろう。家族に繰り返してうそをついて金をせびるどら息子の言うことよりは、誠実なホームヘルパーのいうことを信じるであろう。信用を強制するために、保証金を積ませたり懲罰で脅迫することがあるが、これも他人には有効だけれども、家族には甘いものになり、信じてだまされるのは家族によって、ということになりがちである。これらの点からは、家族であることは、むしろ信にはマイナスとなる。家族内かそとの他人かで、信の有り方に特に違いを設けることはないという話になる。

親切・同情と信とのあいだには決定的にちがうところがある。信は、「知」に属する。だが、親切や同情は、知ではない。親切は、意志・意欲であり、働きかけていく能動的なも

のである。同情は、相手の悲しみ苦悩を知ろうとする面もあるが、慈悲心として、やはり、相手に実践的に働きかけていく意志をもってのものである。この意志・意欲の実践的な点で、親切・同情は、相手とのあいだに種々のことなつた距離をもつ。基本的に、われわれ（日本人）の親切・同情の相手は、他人であり、「傍観者」としてこれにかかわる。だが、家族同士では、困っていたり悲苦の受難ということでは、「傍観者」にはとどまらず、「当事者」になって、超親切・超同情になってしまうのである。

これに対して、信頼等の信という「知」においては、他人であろうと家族であろうと、見知る者としての自分の位置は変わらず、基本的には、傍観者として、信じるべき相手を、認識対象として向かいにつき離して立てて、これをながめるのである。その発言を信じるかどうかは、他人であろうと、自分の家族であろうと同じようにして、ことの真偽を検討しその言葉が真実か否かと判断する。しっかり判断するには、つき離してよく見ることができるのでなくてはならない（信用の「用」、信頼の「頼」は、知ではなく実践的契機になるが、これもまずは、つき離して見ることには、逆らわないであろう。真実と見なして信じられなくては、「用」いられず「頼」りにもできない）。うちのものでも、そとのものでも、同じように、対象として自分の向かいに立てて、懷疑して、そのうえで懷疑不要と判定して、うけいれるのである。同情や親切では、うちの者には、超同情・超親切になって傍観者にはとどまらず「当事者」になるのだが、「信頼」「信用」では、家族であろうと他人であろうと変わらず、傍観者として見る・知ることになり、信じることになる。この「知」としての根本的なあり方からいって、信頼を含む信は、うちとそとを、親切・同情のように区別しないことになっているのだらうと思う。

平成 15 年 12 月

『ぷらくしす』（広島大学文学部倫理学教室・西日本応用倫理学研究会）2003
年秋号 1~17 頁